慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若きヘッセの人生態度乃至世界觀
Sub Title	Young Hesse and his attitude for life and world-view
Author	井手, 貢夫(Ide, Ayao)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.4, (1955. 2) ,p.91- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00040001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若きヘッセの人生態度乃至世界觀

井手貢夫

ここでは若きヘッセの精神態度といつたものを考察して見たい。明白に人生觀乃至世界觀として考察すべきことであるが、しかし、じつさいには若い彼の世界觀はまだそこまでは熟していない。むしろ人生態度を見るといつた氣持ちで見て行くことの方が適切なものがあると思うのである。世界觀ということについても同樣である。

彼の出世作「ペーター・カーメンチント」の中で主人公は都會の文學者、美學者、音樂家、學生たちを評してこういつている。「大部分の人々にあつては、その思索と情熱のあらゆる精力が、たゞ、社會、國家、學問、藝術、教授法など狀態や設備にむけられていて、外面的な目的なしに自分自身に築きあげ、時と永遠とにたいするみずからの個人的關係を解明しようとする欲求を知る者はじつにすくないように思えた。」註1

ヘッセ自身が「ペーター・カーメンチント」について述べているように、これこそ彼の「全作品をつらぬく赤い絲」註2であり、彼の生涯を通じての態度であつて、たゞ當時の彼が、この永遠なるもの、絶對なるものを、たゞいたずらに人間的なものから離れたいわゆる自然の中にのみ求める傾向がことに强かつたことは、やはり彼の若さであつて、「私はカーメンチントの變人らしい隱遁的姿勢にとゞまつてはいませんでした。私は自分の發展の過程において、時代の諸問題を避けはしませんでした。」註3という彼の積極的ではないまでも、消極的ではない力のある態度はもつとのちの彼においてはじめて見られることである。もちろん當時の若い彼とても、一應は都會人にも、社交的な人間にもなろうとしたのであつて、バーゼル時代は「ヴィルヘルム・マイスター」の影響もあつて、ことにそう

いう努力もしたのであつたが、しかしとうてい彼がその人でないことはペーターの場合と同様であつたし、またいわゆる都會やサロンの中にはあまりにも多くの失望を見いだしてきている。そしてそれがおのずから彼をして永遠なる絶對者のもつとも直接に感じやすい自然に一層むかわしめ、それが「時と永遠とにたいするみずからの個人的關係を解明しようとする欲求」ともなつたのであつた。それではこの問題を當時のヘッセがどのように解明していたかということであるが、この點に關しても專門の哲學者でない彼に、ことに當時の彼に系統的な十二分の思索の結果を求めることは無理であつて、愛する自然から彼が養い得た感情と浪漫派の諸作家を主とする彼の讀書によつて得られた思想を基として彼の體驗を通じてかち得られた態度を見るということの方がより適切である、というべきであろう。なお彼が讀書によつてかち得た思想ということになると、若い彼がゲーテとニーチェに傾倒していたことからして、この兩者がどういう風に彼に影響を及ぼしているかということが非常に興味のある問題であるが、それを一言でいうならば處女作「眞夜中すぎの一時間」に見られたひたすらに夢幻的な態度から、「ルールー」において示された現實的態度への是正、音樂性にたいする造型性への努力という點である。註4 ニーチェによつてそれはディオニゾスとアポロとの對立として教えられ、自覺されたものであつた。ヘッセ自身、「眞夜中すぎの一時間」を再錄した「初期の散文集」の序文の中でもいつているように、彼の素朴で健康な、たくましい生活力をもつ本性が、マーテルランクやゲオルゲのもつ耽美的な危險を早くもかぎつけたことは當然であつて、註5 その點でゲーテやニーチェから當時の彼が攝取したものも、必竟彼の內心の欲求するところのものであつたのである。そしてそれ以外のもの、たとえばニーチェのもつ嚴しい徹底した客觀的な現實凝視というものは、彼のうちにその欲求が目覺め、それに耐え得るまでは得られなかつた。彼にこの現實凝視を回避せしめて、ひたすらに善美なる眞實としての絕對にむかわしめたものは、彼が幼少から育成されたその家庭の敬虔主義的傳統であつたが、註6 同時にドイツ文藝のもつ非社會的、逃避的性格にもよるものであることはいうまでもない。註7 このことはしかしその社會に生き、その環境に育成された人間のもつやむを得ざる限界である。人が攝取し得るものは彼の欲求するもののみであつて、そこにその人の置かれた時代的社會的個人的限界と必然とがあるのである。

さて「時と必然とにたいする」と彼はいつたが、とくに「時」というものについての彼の見解は特別にはこの時期には見出し得ない。

永遠についてはしば〳〵語つているが「ルールー」の中のつぎの言葉が思い出される。

「生命の内部には永遠の力と美とが半ば睡りながら横たわつていて、その豫感は夜の電光のようにときおり謎のようにきらめきだしてくるものだということを、詩人は今日もなお普通の人以上に信じている。そしてこの場合詩人にとつては通常の生活のすべても、彼ら自身も、彩色された綺麗な垂幕の上の繪にすぎず、この垂幕のうしろにはじめて本來の生活、眞實の生活がおこなわれる、そういうように思われる。」註8

晩年のヘッセにあつてはしば〳〵サンスクリットのマーヤー（幻影）という言葉でこの現實の世界が示されている。若いヘッセの上掲の表現は遠慮深いいゝまわしではあるが、しかしそれはすでに晩年にいたるまでのヘッセの根本的態度を語つている。じつさいに若いヘッセは永遠なるもの、絶對なるものを常に外部では自然の内奥に、内部では個人の魂の奥にこれを求めている。そしてそれがあの世に通ずるものであり、母の國であり、そこにこそ眞實の世界があつて、それが無邪氣な幼兒の心や夢見る詩人の心やいわゆる自然物の中に顯現するのである。この意味で死がヘッセにとつて、特別意味深いだけではなく親しいものとなつてくる。

このように永遠なるものにたいして現實というものがある距離をもつている。この現實の世界すなわち永遠の世界というようには見られていない。もちろんこの永遠は現實界をも支配しているには違いないのであるが、すくなくともこの現實の人生そのものゝ中に、ことに社會や都會や人間の一般的生活の中に求められていない。それはそのような社會から抽象された個對絶對という個人的立場においてのみ考えられていることはヘッセ自身のいう通りであつて、そのばあいにその個人と社會との關係というものは考えられていないのである。しかしブルックハルトの、歴史の中に恒常なるものを見出さんとする態度がどんなにか彼を惹きつけたであろうことを思えば、彼は社會そのものゝ中にも流れている絶對なるものに氣がつかなかつたわけでは決してないに違いない。たゞこのばあい、彼が永遠なるもの、絶對なるものを、自然とか、幼年の思い出とか、死とかそういうものにおいてのみ見出し易かつたということ、たとえ、ペーター・カーメンチントの中でものちにはそれに氣づいて、一般に人間への愛を持とうと努力してはいるけれども、結局重點が社會的なもの、文化的なものから離れたということ、そして社會的なものや文化的なものにたいするはつきりした態度や積極的な批判を持

ち得なかつたということにおいて、それは彼自身も認めていることであるが、當時の彼の限界があつた。そしてそのためにいわゆるロマンティケルとしての色合がそれだけ濃くなつたのである。したがつて彼の反文化的乃至反社會的傾向というものは、當時にあつてはことに彼の個人的な立場における抗議にとゞまりやすいという缺陷をもつた。それ以上に出ることは當時の彼には荷が重すぎた。フーゴー・バルの言葉をかりればそれは彼の精神の經濟の問題であつた。

したがつて彼の永遠なるもの、絶對者というものが、これらの現實にたいして持つ意味というものは絶對であるとされるだけで、人間社會が永遠にたいしてもつ意味、あるいはそれが大きな永遠の流れの中でどんな役割を持つかというような問題はまつたく考えられていない。すくなくとも明白な形においては示されていない。

それでは永遠なるもの、絶對なるものにたいして持つ個人の役割乃至意味とはどういうものであろうか、ということが當然問題となるのであるが、その前にこの永遠なるもの、絶對なるものがヘッセにおいてどのようにあらわれているかについてすこしく見て行きたい。

彼の藝術的使命はこの永遠なる絶對者を表現することにあることは、すでに引用したヘッセの言葉によつてもうかゞわれる。ペーターも「藝術というものはあらゆる時代に、我々の中にある神秘なものゝ沈默の欲求にある言葉を與えようと努力していた。」註9 といつており、寫實主義者ティチアンの繪にさえ、畫家自身を裏切つて、畫家の內部にある永遠への憧れが無意識に表現されている、といつている。したがつて、ヘッセにあつては藝術家は絶對的神と一般人との間にたつてその仲介をなす宗教家と同じ立場にある。それ故彼は、「一般にこの眞に信仰するものこそ我々美學者にとつて唯一のふさわしい敵である。」註10 といわねばならなかつた。

それでは彼が「眠られぬ夜々」の嘆きを訴えたミューズの神とはこの絶對なるものにたいしてどういう關係にあるのか。このミューズへの愛こそは彼が婦人の愛を通じて達する最後の愛であつた。彼は美の神に呼びかけて、「お前は知つている、お前が私の最後の愛であることを、お前の名はマリアーであり、またエレオノーレであることを、お前がベアトリチェであることを。」註11 といつた。しかしこの愛の窮極の對照であり、母なるエーヴアーでもあるであろうこのミューズの神と、彼が一般的に永遠なるもの、絶對なるものと

していつているものとは、多神教的な考えをもたないかぎりは悟性的には當然一致すべきものであるが、しかしかならずしも同一のものとしては感ぜられない。ということはヘッセが永遠なるもの絶對なるものとするものは、また彼の内心の奥にあるものであり、自然の奥にあるものであり、また女性への愛の奥にあるものでもあるが、それらはその通ずる道によつて違つた顔やすがたとして感ぜられるということであり、さらにいえば、ヘッセは一切のものの奥にある絶對者を彼がその感ずる時と所とによつてそれにふさわしい姿と顔とを與えずにはいられなかつた、ということなのである。

前述の通り彼は宗教家と藝術家とを比較したが、ベーターが不具者ボッピーを一人家に閉じこめて、自分たちだけで休日を樂しんでいるうちにみずからの行爲を反省して、神とつぎのように對話している。

「ある力強い眼に見えないものゝ手が私の胸の上に置かれ、心臓をしめつけ、恥辱と苦痛でそれを充したので、私は打ち負かされ、慄えだした。今こそ神が私と一言交えようとしているのだと悟つた。

『汝、詩人よ。』と神はいつた。『汝、ウムブリアの聖者の徒よ。汝、人々に愛を教え、人々を幸いにせんとする預言者よ。汝、風の中に、はた水の中に余の聲を聞くことを願う夢想家よ！』

神はいつた。「汝は一つの家を愛している。その家の人は汝に親切であり、そこで汝は樂しい時を過している。それなのにこの家を余が立寄るにふさわしくなり得るその日に汝はそこより走り出で、さらに余を追い拂わんと企てる。汝、聖者よ！汝、預言者よ！汝、詩人よ！』註12

この神は聖者の神である。あるいはヘッセの敬愛するウムブリア人、アッシジの聖フランシスの神、カソリックの神かもしれぬ。これと同じ調子でクヌルプはその最後に神と對話している。

もちろんこのような神が、だからといつて平素ヘッセの心にあるという必要はない。作品の諸人物を作ると同じくそれ〴〵の神が彼の心のうちに作り出されるであろう。しかし聖フランシスへの傾倒がプロテスタントの彼をカソリックに近づけたように、汎神論的な神が人格神的なものにうつゝて行くのではないかという疑いは一應起り得るでもあろう。

しかし、後年はつきりヘッセがいつているように、彼はいわゆる宗派的なキリスト教徒ではない。ある宗派ある教義に捕われずに眞實なるもの、永遠なるものを求めて行き、そしてその窮局なるものを信ずる人であることを思えば、これらの樣々な神々は前述せるごとくその時々に語りかける相手として心に浮ぶ映像であつたというべきであろう。たゞそのような映像に語りかけずにはいられない、そういう精神の世界に遊ばずにはいられない彼を我々は忘れてはならないというべきであろう。

さてそれではこのような永遠なるもの絶對なるものにたいして、個々の個體は一體どういう存在であろうか。さきに引用した「ルールー」の言葉にしたがえば、「通常の生活のすべても、彼ら自身も、彩色された綺麗な垂幕の上の繪にすぎず、この垂幕のうしろにはじめて本來の生活、眞實の生活がおこなわれる。」というのであるから、後年のヘッセのいうがごとく、まつたくのマーヤーにすぎないものであろうか。それでは個々の存在の意味というものは一體どこにあるとするのか。あるいはそれ故にこそこのうたかたの存在を意味あらしむるために、個々の存在は永遠に憧れ、「時と永遠とにたいするみずからの個人的な關係を解明しよう」とする欲求を持つべきであるとするのか。おそらくこれは現實に失望することの多い詩人の衷心の願望にはちがいない。しかし彼の鋭い感覺と力強い生命力はこの現實をそのように概念化することだけで滿足し得ただろうか。

この點ではアッシジの聖フランシスの教は若い詩人を救つたのではないかと思われる。地上の一切のものを兄弟と考え、それらすべてが等しく神の子であるとするその愛の思想は永遠への献身に深く浸透されているのにかゝわらず決してその具體性を失つていない。しかし若い詩人の場合なおそれは一つの理想の世界であつたようである。ペーターはフランシスの教えに導かれてこういつている。

「私は現代の人々に、大地の鼓動に耳を傾け、全體の生命に參與するように、そして人々がその小さな運命の壓迫にもかゝわらず、我々は神ではなく、また我々自身によつて作られたものでもなく、大地とこの全宇宙の子供であり、一部であることを忘れないように、教えたいと思つた。また、河や海や流れ行く雲や嵐も、詩人の歌や我々の夜々の夢と同じく、天と地との間にその翼を擴げ、市民權について、また生きとし生けるものゝ不死について、疑いない確信を得ようとする憧憬の象徴であり、運載者であるということを思い出させたいと思つた。じつさいすべてのものはそのもつとも奥深い核心でこの權利を確信していて、神々の子として、不安なく永遠

のふところに憩うているのである。」註13

さてこれらの個々のものはそれではその營みにおいて宇宙全體にたいしてどういう意味をもつであろうか。

この問題にたいして當時のヘッセは具體的なことは何も語っていないようである。しかし例の「眠られぬ夜々」の中の美の神に呼びかけたつぎの言葉が彼の考えを語ってくれる。

「たとえ私からはたゞ一つの言葉も韻律も殘らなくとも、しかしお前という不滅のものが私の一つの特色を後々までも運んで行くだろう。そして私の後にくる者は私の名を知らなくともそれを尊重し理解するだろう。彼らのうちのある者が完成する不滅の作品のどこかに、たゞ一つの言葉であれ、一つの音調であれ、小さなやわらかな息吹であれ、何かゞ私を永久のものとするだろう。」

右の言葉は個人の永遠なものによせる努力がたとえその時には實を結ばずとも、いつの日か誰かによって果される仕事に加えられて行くことを示している。このことは後年の童話「奇星異聞」„Merkwürdige Nachricht von einem andern Stern“を讀むときに一層明白になるのである。

それはある星の若者が我々の住むこの地球と思われる星の世界をたま〳〵訪れて、ここでは人殺しや戰爭やさまな〳〵悪德の行われているのを見て思うのである。「――そんな話も恐ろしい昔話の中には語られているのだ――それにしてもなお、未來への豫感、神々についての夢、何か魂の芽生えのようなものは彼らの中に存在するに違いない。さもなければこの美しからぬ世界の存在はじつさい單なる誤謬であり、まったく無意味なものに過ぎないであろう。」註14

この若者の故郷である星の狀態がヘッセの一つの未來の理想を示している。しかしこの理想境にはいわゆる現代文明の跡はすこしも見られない。人々は高い知性を有しながら小兒のように清純に素朴になっている。若い詩人にとっては文明とか社會というものがまだ積極的にとり上げ得ない問題であったことはさきにも述べたが、しかしこの時に示された姿勢には終世かわらないものがあることはこれによっても知られよう。

永遠なるものにたいする善い意志によって個人の努力はその意味をもつとすれば悪はどういうことになるのか。「ペーター・カーメン

チント」の中のすべてのものが神の子であり、不安なく永遠の懷に憩うている、という言葉につゞいて、「我々が我々の中にもつているすべての惡しきもの、病めるもの、汚れたものは矛盾し死を信ずる。」という言葉がある。

若いヘッセが惡いものはすべて滅びる、と簡單に考えていたかどうかは甚だ疑問であろう。おそらくこれは當時の彼をもつとも苦しめ、そしてそれ故におそらくふれることを避けていたものであることは前にも述べた。むしろ、惡しきものは矛盾し死を信ずる、ということはあるいは彼みずからの體驗から出てきたことであつたかも知れない。そしてそこから一般的にそういう願をもつたのかも知れない。しかし、それにしても、彼は結局オプティミストだといわなくてはならないだろう。もちろんこの言葉があたえる響きほどに簡單な意味ではないにしても。したがつてそのような言葉を使うべきではなく、むしろオプティミストではないとした上で、次のことをいうべきかも知れないが、結局彼はこの世界がよくなる希望をもつている、すくなくとも持つていたことはさきに引用した言葉によつても知られるからである。しかし十九世紀の科學的進歩主義思想家の樂觀論とはまつたく異つて、悲痛の底から出た希望ということもある。ことに惡の問題については何ら解決し得なかつた彼として、とにかく希望を持たずにいられなかつたこと、そして強く生きぬく力を持つていたこと、そしておそらくその故にまた希望的であり、自己の星を信じていたろうこと、そういう意味ではやはりオプティミストといつてよいかもしれないのである。

さてこゝで我々は抽象的な個というものについての考えというよりも、彼が彼自身の運命についてどう考えていたかということを見てみよう。

「私は友情を、婦人の愛を、青春を信じていた。それらがつぎ〳〵と私を見すてゝしまつたのだから、どうして神を信じて、その強力な手に自分をまかせなかつたのだろう。しかし私は生涯子供のように憶病で、我が強かつた。そしていつも本當の生活が嵐のように私に襲いかゝり、私を思慮深く、豐かにし、そして大きな翼に私をのせて完全な幸福へむかつて運んでくれる日を待つていた。

しかし賢明でつゝしみ深い生命は默つていた。そして私の漂うにまかせた。生活は嵐も星もおくつてくれず、私がふたゝび小さくなり、辛抱强くなつて、私の我を折るのを待つていた。それは私に尊大と知つたかぶりの喜劇を演じさせ、それが通りすぎるのを見て、

迷つた子がぶたゝび母を見出ずであろうことを待つていた。」註15

これはペーター・カーメンチントが親友リヒアルトを不慮の死によつて奪われたときの述懐である。この諦めの言葉の中に彼の強靱な生命力とその強靱な生命力をもつてしても何ともならないある大きな力への屈服、宿命觀、そこから彼を抱き慰めてくれる母への希望を人は明らかに見ることができる。

詩人の學校時代の惱み、神學校からの逃走、その後の一の職業から他の職業へと放浪のあいだの苦惱、またおそらく友情や戀愛において經驗したであろう多くの苦澁、それとペーターの「また私は幸福というものは外面的な願望の充足とほとんど關係のないものであるということ、戀する若者の惱みは、それがどんなに切ないものであろうとも、すべて悲劇のもとにはならぬということをしだいにますますよく悟つた。」という言葉とを思いあわせるとそこに詩人の生命力の純化されて行く經路、また彼の精神の本質的なあり方というものをよく見ることができると思われる。そしてそこにユーモアの世界が用意される。

「さてしだいに人生のユーモアにたいする眼が開けてきた。そして自分の星と和解し、人生の食卓からあれこれとうまいものをつまみ味わうことがだん〳〵たやすくできるようになると思えた。」註16

しかしこのユーモアの世界というものは簡單なものではない。人が人生において受ける苦難が深ければ深いほどに、そしてそれに徹することが深ければ深いほどに、またこのユーモアの世界も深くなるはずである。そして若いヘッセに何程の深さがあつたかということにはまたいろ〳〵の議論もあろうし、ドイツ浪漫派のイロニーの中から早くヘッセがそういうポースを受けとつたということも考えられようが、苦惱を眞正面から受とつて行くことのできる彼のき眞面目さを思えば、このユーモアもとにかく彼なりに苦惱に徹したその果から生れたものということができよう。それはともすると單に甘い感傷とのみ見えることがあるにしても、若さの中になお深い凝視のあることは見のがせない。

「私は青春時代が過ぎ去るのを感じた。また自分の生命を一つの短い行路と見、そしてまた自分自身を一人の旅人、その歩みやその最後の終末も大して世間から騷がれもかえり見られもしない旅人として見ることのできる年代にむかつて自分が成熟して行くのを感じ

た。しかし大した嘆きも感じなかつた。」

いつも大した嘆きを感じなかつたかどうか。青春のすぎ去つたのちにはどんなにか彼はそれを惜しんでいる。しかしそれはどうにもならぬこと、失われた青春にはかえることは許されぬことゝ、ラオシヤーもしつかりと自分にいつてきかせて、これを見つめている。もちろん概念的には一應たれでもそういうことができるし、さらに「人はある人生目標、ある好きな夢を見失わずにいても、自分をけつして必要かくべからざるものとは思わずに、途中でしば〳〵ひまを作つて、良心の苛責を感せずに、一日怠けたり、草の中に寢そべつたり、歌を口笛で吹いたり、底意なしに現在を樂しんだりする。」註17 というベーターの健康さを思えば、凝視の强さということも割引されるかも知れぬが、前にも述べたように、どんなに早くから彼がすべてのものゝ陰に死をかぎつけていたか、そしてその死と親しもうと努力し、またどんなにしば〳〵死の靜寂に憧れたかという事實をもう一度こゝで思いだす必要がある。

「惱みや死があなた方のところへ來るときにはその惱みや死をもう怖れずに、眞面目な兄弟姉妹として、本氣で兄弟の愛で迎える」註18 ことをベーターは人々に教えたいと願つた。

凝視の底に愛を湛える。その凝視と愛とそれ〴〵の深さが加わるほどに甘さが失われてユーモアが苛烈となる。それは晩年のヘッセにまで待たねばならないにしても、これはかわらざる彼の人生態度であつて、その底の永遠への合一と努力と確信、たとえそれが死によつてゞあろうとも、この點において彼は自己の運命を信ずる人であつた。

それではこの運命はどういうふうにして導かれるか、神によつてか、必然によつてか、神はこの必然をどのように含むか。問題はまたはじめに歸つて絕對者の性格にもどるが、こういう問題はヘッセは何も語つていない。惡の問題などとともにこの問題は後年のヘッセにおいて見るべきものである。

以上でこの時代のヘッセの思想の概要を見盡したと思うが、ヘッセ自身「ベーター・カーメンチント」について、「この書物の中の多くのものがあなたがたにはおかしく、古めかしく、氣まぐれに見えるでしよう。」註19 といつているごとく、當時の彼自身においても、當然のことながら非常に多くのものが未熟のまゝでいる。それらは彼の成長とともに成熟し、また解決されて行かねばならないもので

ある。そして甚だ當然のことながら、彼が中年において、また晩年において開花し得たすべての萠芽がこゝに見出し得ること、しかも歴々とそれをあとずけ得るほどに見出し得るということは非常に興味の深いことである。

全體として我々は彼の中に非常に多くの東洋的要素を見いだし得る。たとえば非常に早くから強い無常感を彼がもつていること、死や惱みにたいする親近さ。強靱な戰いの一方で運命と融和し、諦念によつて淨化し、內面に向うその性向、そしてこのような傾向がたとえ彼の個人的な必然から生じ得たにせよ、一方でドイツ浪漫派の傳統の一つの行きつくところを示すとともに、したがつてそこに西歐的なものゝ一つの行方を見ることができるのである。

文化や社會の問題はまだ若い詩人の視野の外にあつた。それは彼の自我と絕對との對決に向けられている眼がそこまで擴げられる時をまたねばならない。それもヘッセ自身が「ペーター・カーメンチント」について述べたことであつた。

註

1 H. Hesse: Peter Camenzind s. 68 (Fischer 1925)

2 über《Peter Camenzind》, Gruß an die französischen Studenten zum Thema der diesjährigen Agrégation von H. Hesse, Separatausdruck aus der《Neuen Zürcher Zeitung》Beilage Literatur u. Kunst, Nr. 1688(30), von Samstag, 4. August 1951.

3 ibid.

4 ヘッセは「眞夜中すぎの一時間」を再錄した「初期の散文集」の序文の中でつぎのようにいつている。なおつぎの註を參照せられたい。「その詩的本性は日常世界の嵐と低地とから、夜と夢と美しい孤獨とへの退却であつた。そしてこの書物には唯美主義的傾向が缺けていなかつた。」Hesse: Frühe Prosa, Geleitwort s. 13 (Fritz u. Wasmuth 1948)

5 ヴィルヘルム・フォン・ショルツは「眞夜中すぎの一時間」の出版された當時この書がマーテルランクとシテファン・ゲオルゲの影響をうけていると批評したが、ヘッセはマーテルランクの影響については正しいが、この書物が世に出たときには自分はシ

テファン・ゲオルゲのものは一行も讀んでいなかつたといつている。彼がゲオルゲについて知つたのはその二三ヵ月後バーゼルに來てからであつた。そしてマーテルランクの初期の作品についても、それを彼は非常に愛していたけれども、その中にある「一種の病的な、自分自身に惚れこんだ內向形式に疑いをもつたときに、というのはこの危險はまた私と私の文藝にたいしても、存したので、その後まもなくゲオルゲ崇拜がはじまつたさいに、私は別の、私にとつてもつと運命的な種類の唯美思想を知つたのである。それは一種の秘密者同盟的な熱情を、一種の潛越な徒黨的秘教を養うことであつて、それを自分は感情的にはじめから拒否した。『眞夜中すぎの一時間』の世に出てから數カ月後に書かれた小說『ルールー』の中のヘルマン・ラオシャーの多くの言葉は、ともかくもどれほどに『ラオシャー』が世間と現實の一部を自分に征服し、一部には世間おじした、一部には高慢な、孤立の危險から逃れようとする一つの試みであつたかということについての消息を與えよう。その次のこの道における歩み、健康、自然、素朴をほとんど强調しすぎた歩みがそして『ペーター・カーメンチント』であつた。」Frühe Prosa, Geleitwort s. 14.

6 ヘッセが幼年時代にいかに善と惡との對立に惱まされたか、兩親の敎えが彼の身についているので、いかに良心の不安を感じたかは「デーミアン」の冒頭の數頁がよく語つている。このような良心の不安からのもつとも容易な逃避は彼が幼少から親しんでいた自然の世界であつた。そしてそこに彼の求める絕對がもつともよく顯現したのである。しかも自然主義文學にうみ、都會のアスファルト的文學からの是正への要求は、一般にルソーの言葉を再び合言葉としたのである。

7 「欲しようが欲しまいが、ひとはこうして發展する帝國主義の地盤の上に立つている。革命的な民主主義から發した古い人格發展の要求（その眞正さ、偉大さ、深さおよび發展の要求）は唯一の支配的な主題として作用しつゞけ、內面に向い、社會を斷罪し、しかしまさにそのことによつて社會を何か外面的な二次的なもの、內的出來事のための單なる枠、舞臺の書割、誘因にしてしまう。それは主觀的な體驗と個人の內面的な發展法則から出發して、堅固な世界觀的基礎を得ようと努める。しかしこのさいこのような個人の周圍に必然的な眞空が、空虛な空間が生じるということは、ます〳〵明らかになる。」ルカーチ「ド

イッ文學小史」岩波版、一六三頁。

「詩人の孤獨は、詩人が呼吸し得ないようなすべてのこれらの生活形式にあつてはもはや何か〝正しくないのだ〟ということにたいする痛切なしるしである。」Fritz Strich: Dank an Hermann Hesse,(Der Dichter und der Zeit, s. 380 A. Francke AG. Verlag Bern 1947) なお Strich: Dichtung und Zivilisation, Der Dichter und der Staat (C. H. Beck. München 1928) 參照。

8 Hesse: Frühe Prosa ibid. s. 208

9 Peter Camenzind, ibid. s. 135

10 Frühe Prosa, ibid. s. 278

11 ibid. s. 265

12 Peter Camenzind, ibid. s. 183

13 ibid. s. 162

14 Hesse: Märchen s. 72 (Fischer 1919)

15 Hesse: Peter Camenzind, ibid. s. 112

16 ibid. s. 156

17 ibid. s. 158

18 ibid. s. 163

19 Über ‹Peter Camenzind›, Gruß an die französischen Studenten von H. Hesse ibid.